

## ⑩ 岡田三郎助の死去

黒田清輝歿（大正十三年）後、西洋画科、次いで油画科の主任をつとめた教授岡田三郎助は、昭和十四年九月二十三日に死去した。彼は西洋画科設置とともに助教となり、直ちにフランスに留学して帰国後教授となった（明治三十五年）。以来、図案科、西洋画科の指導にあたりとともに、文展、農展、勸業博覧会をはじめとする諸展覧会の審査員を歴任し、昭和八年には帝室技芸員、帝国美術院会員に任命され、同十二年には第一回目の文化勲章を授与されるところに帝国芸術院会員にも任命された。美術界におけるその輝かしい経歴にはまさに時代の寵児といった感があるが、それは優れた作品と人柄に基づくものであった。彼が指導した西洋画科、油画科と本郷洋画研究所を合わせると、夥しい教え子が居り、洋画のみならず工芸界においても彼を師と仰ぐ人々もあって、その声望のほどは『画人岡田三郎助』（大隅為三・辻永編。昭和十七年、春鳥舎）に寄せられた関係者の追想によって窺い知ることができる。岡田三郎助の死去により藤島武二が油画科主任となった。なお、翌十五年二月十四日から二十日まで府美術館で遺作展が開催され、大小五百余点が展示された。

## ⑪ 図案部成績展示会

工芸科図案部は昭和十四、十五、十六年の三年間、毎年成績展示会を開いた。その記録は「東京美術学校図案部展記録」と題してフイルされている（提供三好二郎氏）。

昭和十四年の第一回展は九月十五日から二十日まで銀座三越で開

かれた。左記はそのプログラム（印刷物）である。

### 第一回東京美術学校図案部成績展示會

私等是最初の試みとして吾校圖案部生徒の平常の成績を發表致す事にしました。

從來やつて來ました年々の卒業成績の展觀は所謂卒業製作の發表でありまして大袈裟な量と極まつた意圖の下に打ちこんだ仕事をさせる、やゝもすれば展示表現に墜つるの感があつてこれでは圖案部生徒の面目を充分に語るものとは謂ひにくい處があります。在校生徒の心の往くまゝにあれやこれやと聊のおぢけもなく掘り下げてゆくその仕事にはたとへ破綻がありこなれぬものがあるにしても又一面に摘み採られ掬さるべき妙處があるのだと思ひます。こゝに我々教員どもは生徒平生の苦心と陶酔を暗の中に葬りさる事の惜しさから彼等一年中の成績から數點を撰んで一般の批判に委ねたいと存じます。若い學徒の物足りなさやかたくなさ貧しさの中から彼等の研究態度に數分の見處を發見してやつて戴きたいとお願ひ致します。

昭和十四年九月十五日

東京美術學校圖案部主任 和田 三造

### A 基礎研究

岩本 敏郎 植物解體組織

石井 輝夫 花解體組織

石山 彰 鳥解體組織

西島 久康

植物解體組織

鳥解體組織

幾何學圖案

堀田 巖

惱ミ(内面生活表現)

堂前 俊雄

花解體組織

李 禎 泰

植物解體組織

太田 浪三

雲解體組織

渡邊 守治

鯉解體組織

河 潤之介

植物解體組織

加藤 元男

水解體組織

川本 敏郎

雲解體組織

吉川 正巳

解體組織

田中 豊男

植物解體組織

上原 政一

植物解體組織

黒田 正夫

植物解體組織

久保 忠彦

植物解體組織

山田金太郎

トンボ解體組織

松井 董博

鶏ノ表情

松村 數雄

植物解體組織

馬淵 聖

水解體組織

前川 治朗

植物解體組織

藤形 一男

植物解體組織

藤本 能道

鳥解體組織

キユービズムニヨル

小山 清男

駒井 達郎

安達 勝三

坂本 貞雄

由良 玲吉

水島 秀男

松風 榮一

白井 正孝

最上 忠敬

清水 國祐

今泉 六郎

B 商業圖案

石山 彰

西島 久康

大崎 定家

加藤泰治郎

龜井 透

瀧口 二郎

古田 順吉

詩ニヨル〔聯之〕職想ノ解體組織

昆蟲ノ一ト

心カラナル感動(空軍)

解體圖案

機械美

鳥解體組織

植物解體組織

雲解體組織

橋梁ノ裝飾的表現寫真

顯微鏡下ニヨル自然ノ圖案の表現

雲解體組織

球體ノ變化

パンフレット表紙

ポスター

ポスター

ポスター

ポスター

パンフレット

ポスター

ポスター

パンフレット

ポスター

(壁畫ヲ兼ネタル)

藤本 能道

ポスター

小山 清男

ポスター

樋口益次郎

パンフレット

C 工藝圖案

石井 輝夫

婦人夜會服圖案

石山 彰

ハンドバッグ圖案

西島 久康

手拭圖案

堀田 巖

裝幀圖案

渡邊 守治

海水着セット圖案

勝田 猶興

VERRE PEINT

河 潤之介

航空郵便ポスト

加藤泰治郎

裝幀圖案

田澤 武美

クツシヨン圖案

竹田 忠丸

洋服地圖案

黒田 正夫

ハンドバッグ圖案

古田 順吉

喫煙セット圖案

陶磁器釣花活

小泉 正名

テーブルセンター

小林重太郎

鳩舎設計圖

建設譜(バレ舞臺裝置)

土ト兵隊(舞臺裝置)

坂本 貞雄

壁掛(手織)

ステインドグラス

壁面漆塗飾額

壁掛(綴織)

建築年鑑

水島 秀男

スタンドンエード

最上 忠敬

ステインドグラス

樋口益次郎

(温泉浴室用)

建築年鑑

D 立體(實物)

石山 彰

ドアレリーフ

渡邊 守治

マスカン

(イロハ順)

展覽會開催について十四年五月から計画が発表され、四年生全員が幹事となって夏休み中に作品の準備を進め、新聞、雑誌社、美術団体等へ広く案内状を出し、批評家に批評を依頼した。準備の甲斐あって、好評を博し、特に基礎研究に重きを置く図案部の方針が評価された。

この展覽會について、大智浩(昭和十三年図案部卒)は「美校圖案部の街頭進出」と題して『美育』第十五卷第十一号(昭和十四年十一月)に感想を寄せている。彼は「この展示會を見てみると生徒の自由奔放な學窓の研究態度を覗き得るし、同時に學校の指導、教育等に關して色々とその長所と缺陷とを見せられる。」と言ひ、基礎研究における「解體組織」について體驗者の立場で次のように解説している。

この言葉は多分學校の指導者に依つて作られた新しい言葉であらう。大體こんな意義だと考へてゐる。つまり自然から得られる資料を必要により再現的な要素に分析し、之を再現的な概念に依らず、自分の意途から直現的に組立てると云ふ事であらうと考へてゐる。従つて一本の麥からその色、量、形線等を寫實により分析解體し、それから得られた視覺的な素材質感、量感、線條感、色感、觸感等を抽出して直現的組立をする事である。即ちこの組立に際して雑多な目的物を簡約し、直接的な聯想による事なく自分の思想と思索を通じての麥を表現する事であらうと思ふ。こんな點が今日迄考へられ、爲されてゐた便化或は模様化と、異つた意味を持つてゐる。も少し具體的に謂ふならば植物としての麥から、美に立脚して必要なリアルな分子に微分され、これを音楽においての作曲の様に各自の思想を通して之等のイマジネーションを積分して、一見リアルな麥とは似てもつかない様な抽象形態に表現され、併も自然にじみ出る人爲的な麥のキャラクターがうかがはれるを云ふ事であらう。

なお、小山清男氏によれば、この大智浩は在校中ポスター・コンペにいつも一等賞を獲得して名を馳せたという。

この展覧会は引き続き十月二日から七日まで大阪市中央商工相談所（堂ビル一階）でも開かれ、十月五日には展覧会に合わせて大阪市産業部主催工芸図案座談会が開催された。当日提示された「話題一斑」（印刷物）には

イ、国策上輸出雑貨の工芸的向上が如何に緊要か、そのために働

く図案の力

ロ、代用品をほんもの今まで進めて雑貨工芸の向上を図る必要と

その図案の進展

ハ、新興工芸図案を實際に活用するに就て

ニ、国策順応のポスターとは

ホ、其他図案全般に就て

とあり、国策順応ということが大きな問題となつていたことが分かる。

第二回展は翌十五年十一月二十一日から二十四日まで、同じく銀座三越で開かれ、一年から四年までの成績品八十四点と三、四年の共同製作九点（広川松五郎題「古典思慕」）が展示され、多くの入場

者があつた。展示構成は第一回とほぼ同じで、A 基礎図案、B 商業図案、C 工芸図案から成つていた。

第三回展は十六年十月十八日から二十一日まで、やはり銀座三越で開かれた。記録に「九月廿日、図案部教官室に役員全員集合、森田（武）先生より御話しあり。即ち、十二月卒業の事愈々



第2回図案部成績展示会（三好二郎氏提供）

実施せらるゝ事となりたるにつき、四年生は卒業製作の為、展示会の諸事務を三年生に一任する事と内定。」とある。戦時体制強化による年限短縮や勤労働員は生徒の活動を著しく狭め、こうした校外活動を行いくくしていった。

なお、今回の展示会には前回同様の展示構成で百二十九点が出品され、左記のポスターが選定、献納された。

情報局へ

1、防諜ポスター	小島 勇
2、 "	太田 浪三
3、空の記念日	石山 彰
4、銅、鉄献納	加藤 元男
5、増産翼賛	李 榎泰
6、再起奉公	坂本健三郎
7、防空	小島 勇
8、 "	小島 康男
9、科学振興	小島 勇
10、銃後奉公	上原 政一
報道部へ	
1、防諜ポスター	河 潤之介
2、 "	水島 秀男
3、小年航空兵募集	山県勇一郎
4、 "	松永 和夫
5、再起奉公	正木 直彦
6、 "	森地 正

7、防空

〃

浜田 照

## ⑫ 『クラシク』発行停止

校友会映画部の機関誌『クラシク』は昭和十三年十二月第四号まで発行されたが、同十四年一月の検挙事件に関連して発行停止となった。当時部員であった谷口広志(同十六年銚金部卒)は次のように記している。

だが、時代はひたひたと軍国主義の体制へと突入するケハイをみせはじめ、学校での軍事教練もいちだんと強化されていった。そのころぼくは、いかに生きるかで学生間に読<sup>「マ」</sup>れている『生活の探求』の著者である島木健作氏を、映画部として学校に招き座談会をひらいた「昭和十四年十月」。どのていど学生があつまるか不安だったが、満員の盛況で島木健作氏の根づよいファンがおおぜいいることを、あらためて認識させられた。また映画部会報「クラシク」には、進歩的な学生にも執筆してもらったが、それらの人たちが唯物論研究をしていたため何人かが検挙され、そのとぼちり「クラシク」は発行停止となった。映画部長の高村豊周先生(光太郎の弟)によれば叱られたことをおもいだす。

——一九四〇年三月、すなわち太平洋戦争勃発の一年まえにぼくは卒業し、大日本飛行協会に就職したのである。

〔『画文集』——わが落穂ひろい——文化運動の軌跡〕昭和五十六年、旭川文化団体協議会